

杜松の樹

グリム
中島孤島訳

むかしむかし大昔、今から二千年も前のこと、一人の金持ちがあつて、美しく、
気立の善い、おかみさんを持つて居ました。この夫婦は大層仲が好かつたが、小児がない
ので、どうかして一人ほしいと思ひ、おかみさんは、夜も、昼も、一心に、小児の授かりま
すようにと祈つておりましたが、どうしても出来ませんでした。

さてこの夫婦の家の前の庭に、一本の杜松がありました。或る日、冬のことでしたが、
おかみさんはこの樹の下で、林檎の皮を剥いていました。剥いてゆくうちに、指を切つた
ので、雪の上へ血がたれました。「#ここから割り注」*（註）杜松は檜類の喬木
で、一に「ねず」又は「むろ」ともいいます「#ここで割り注終わり」

「ああ、」と女は深い嘆息を吐いて、目の前の血を眺めているうちに、急に心細くなつ
て、こう言つた。「血のように赤く、雪のように白い小児が、ひとりあつたらねい！」
言つてしまうと、女の胸は急に軽くなりました。そして確かに自分の願がとどいたよ
うな気がしました。女は家へ入りました。それから一月経つと、雪が消えました。二月
すると、色々な物が青くなりました。三月すると、地の中から花が咲きました。四月する
と、木々の梢が青葉に包まれ、枝と枝が重なり合つて、小鳥は森に餌を起こして、木
上の花を散らすくらいに、歌い出しました。五月経つた時に、おかみさんは、杜松の樹の
下へ行きましたが、杜松の甘い香気を嗅ぐと、胸の底が躍り立つような気がして来て、嬉
しさに我しらずそこへ膝を突きました。六月目が過ぎると、杜松の実は堅く、肉づいて来
ましたが、女はただ静として居ました。七月になると、女は杜松の実を落して、しきり
に食べました。するとだんだん気がふさいで、病氣になりました。それから八月経つた時
に、女は夫の所へ行つて、泣きながら、こう言いました。

「もしかわたしが死んだら、あの杜松の根元へ埋めて下さいね。」

これですつかり安心して、嬉しそうにしているうちに、九月が過ぎて、十月目になつて
女は雪のように白く、血のように赤い小児を生みました。それを見ると、女はあんまり
喜んで、とうとう死んでしまいました。

夫は女を杜松の根元へ埋めました。そしてその時には、大変に泣きましたが、時が経つと、悲しみもだんだん薄くなりました。それから暫くすると、男はすっかり諦めて、泣くのをやめました。それから暫くして、男は別なおかみさんをもらいました。

二度目のおかみさんには、女の子が生まれました。初のおかみさんの子は、血のように赤く、雪のように白い男の子でした。おかみさんは自分の娘を見ると、可愛くって、可愛くって、たまらないほどでしたが、この小さな男の子を見るたんびに、いやな気持ちになりました。どうかして夫の財産を残らず自分の娘にやりたいものだが、それには、この男の子が邪魔になる、というような考えが、始終女の心をはなれませんでした。それでおかみさんは、だんだん鬼のような心になって、いつもこの子を目の敵にして、打ったり、殴いたり、家中を追廻したりするので、かわいそうな小児は、始終びくびくして、学校から帰っても、家にはおちついていられないくらいでした。

或る時、おかみさんが、二階の小部屋へはいつていると、女の子もついて来て、こう言いました。

「母さん、林檎を頂戴。」

「あいよ。」とおかあさんが言つて、函の中から美麗な林檎を出して、女の子にやりました。その函には大きな、重い蓋と頑固な鉄の錠が、ついていました。

「母さん、」と女の子が言った。「兄さんにも、一つあげないこと?」

おかあさんは機嫌をわるくしたが、それでも何気なしに、こういいました。

「あいよ、学校から帰つて来たらね。」

そして男の子が帰つて来るのを窓から見ると、急に悪魔が心の中へはいつても来たように、女の子の持っている林檎をひったくつて、

「兄さんより先に食べるんじゃない。」

と言いながら、林檎を函の中へ投込んで、蓋をしてしまいました。

そこへ男の子が帰つて来て、扉の所まで来ると、悪魔のついた継母は、わざと優しい

声で、

「坊や、林檎をあげようか？」といって、じろりと男の子の顔を見ました。

「母さん、」と男の子が言った。「何て顔してるの！ ええ、林檎を下さい。」

「じゃア、一しよにおいで！」といって、継母は部屋へはいつて、函の蓋を持上げながら、

「さア自分で一個お取りなさい。」

こういわれて、男の子が函の中へ頭を突込んだ途端に、ガタンと蓋を落したので、

小児の頭はころりととれて、赤い林檎の中へ落ちました。それを見ると、継母は急に

恐ろしくなって、「どうしたら、脱れられるだろう？」と思いました。そこで継母は、自分

の居室にある箆笥のところに行つて、手近の抽斗から、白い手巾を出して来て、頭を頸

に密着けた上を、ぐるぐると巻いて、傷の分らないようにし、そして手へ林檎を持たせて、

男の子を入口の椅子の上へ坐らせておきました。

間もなく、女の子のマリちゃんが、今ちょうど、台所で、炉の前に立つて、沸立った

銅をかき廻しているお母さんのそばへ来ました。

「母さん、」とマリちゃんが言った。「兄さんは扉の前に坐つて、真白なお顔をして、林檎

を手に持っているのよ。わたしがその林檎を頂戴と言つても、何とも言わないんですも

の、わたし怖くなツちゃったわ！」

「もう一遍行つてごらん。」とお母さんが言った。「そして返事をしなかつたら、横面を

張つておやり。」

そこでマリちゃんは又行つて、

「兄さん、その林檎を頂戴。」

といいましたが、兄さんは何とも言わないので、女の子が横面を張ると、頭がころり

と落ちました。それを見ると、女の子は恐くなって、泣き出しました。そして泣きながら、

お母さんの所へ駈けて行つて、こう言いました。

「ねえ、母さん！ わたし兄さんの頭を打つて、落しちまつたの！」

そう言つて、女の子は泣いて、泣いて、いつまでもだまりませんでした。

「マリちゃん！」とお母さんが言った。「お前、何でそんなことをしたの！ まア、いいから、黙つて、誰にも知れないようにしておいでなさいよ。出来ちまつたことは、もう取返しがつかないんだからね。あの子はスープにでもしちまひしようよ。」

こういつて、お母さんは小さな男の子を持つて来て、ばらばらに切りはなして、お鍋へぶちこんで、ぐつぐつ煮てスープをこしらえました。マリちゃんはそのそばで、泣いて、泣いて、泣きとおしましたが、涙はみんなお鍋のなかへ落ちて、その上塩をいれなくてもいいくらいでした。お父さんが帰つて来て、食卓の前へ坐ると、

「あの子は何処へ行つたの？」と尋ねました。

すると母親は、大きな、大きな、お皿へ黒いスープを盛つて、運んで来ました。マリちゃんはまだ悲しくつて、頭もあげずに、おいおい泣いていました。すると父親は、もう一度、

「あの子は何処へ行つたの？」とききました。

「ねえ、」とお母さんが言った。「あの子は田舎へ行きましたの、ミュッテンの大伯父さんのところへ、暫く泊つて来るんですつて。」

「何しに行つたんだい？」とお父さんが言った。「おれにことわりもしないで！」

「ええ、何ですか、大へん行きたがつて、わたしに、六週間だけ、泊りにやってくれつて言いますの。先方へ行けばきつと大切にされますよ。」

「ああ、」とお父さんが言った。「それは本当に困つたね。全体、おれに黙つて行くなつてことはありやしない。」

そう言つて、食事を初めながら、お父さんはまた、

「マリちゃん、何を泣くの？」とききました。「兄さんは今にきつと帰つて来るよ。」
それから、おかみさんの方を見て、

「おい、母さん、これはとても旨いぞ！、もつともらおう！」といったが、食べれば食べる程、いくらでも食べられるので、「もつとくれ！ 残すのは惜しい、おれが一人でいだけ

いちまおうよ。「といいながら、とうとう一人で、みんな食べてしまつて、骨を食卓の下へ投げました。

するとマリちゃんは、自分の筆筒へ行つて、一番下の抽斗から、一番上等の絹の手巾を出して来て、食卓の下の骨を、一つ残らず拾い上げて、手巾へ包み、泣きながら、戸外へ持つて行きました。マリちゃんはその骨を杜松の樹の根元の草の中へ置くと、急に胸が軽くなつて、もう涙が出なくなりました。

その時、杜松の樹がザワザワと動き出して、枝と枝が、まるで手を拍つて喜んでいゝうに、着いたり、離れたり、しました。すると木の中から、雲が立ちのぼり、その雲の真中で、ぱつと火が燃え立つたと思つたと、火の中から、美しい鳥が飛び出して、善い声をして歌いながら、中空高く舞いのぼりました。

鳥が飛んで行つてしまつと、杜松の木は又元の通りになりましたが、手巾は骨と一しよに何処へか消えてしまいました。マリちゃんは、すっかり胸が軽くなつて、兄さんがまだ生きてでもいるような心持がして、嬉しくつてたまらなかつたので、機嫌よく家へ入つて、夕ご飯を食べました。

ところが、鳥は飛んで行つて、金工の家根へ棲まつて、こう歌い出しました。

「母さんが、わたしを殺した、

父さんが、わたしを食べた、

妹のマリちゃんが、

わたしの骨をのこらず拾つて、

手巾に包んで、

杜松の樹の根元へ置いた。

キーウイトト、キーウイトト、何と、綺麗な鳥でしよう！」

金工は仕事場へ坐つて、黄金の鎖を造っていましたが、家根の上で歌っている鳥の声を聞くと、いい声だと思つて、立上つて見に来ました。けれども鬨を跨ぐ時に、片方の上沓が脱げたので、片足には、上沓を穿き、片足は、沓下だけで、前垂を掛け、片手には、黄金の鎖、片手には、ヤットコを持って、街の中へ跳出しました。そして日光の中へ立つて、鳥を眺めて居ました。

「鳥や、」と金工が言つた。「何て好い声で歌うんだ。もう一度、あの歌を歌つて見な。」
「いえいえ、」と鳥が言つた。「ただじゃア、二度は、歌いません。それとも、その黄金の鎖を下さるなら、もう一度、歌いましょう。」

「よしきた、」と金工が言つた。「それ黄金の鎖をやる。さア、もう一度、歌つて見な。」
それを聞くと、鳥は降りて来て、右の趾で黄金の鎖を受取り、金工のすぐ前へ棲つて、歌いました。

「母さんが、わたしを殺した、」

父さんが、わたしを食べた、

妹のマリちゃんが、

わたしの骨をのこらず拾つて、

手巾に包んで、

杜松の樹の根元へ置いた。

キーウイット、キーウイット、何と、綺麗な鳥でしょう！」

歌つてしまうと、鳥は靴屋の店へ飛んで行き、家根の上へ棲まつて、歌いました。

「母さんが、わたしを殺した、」

父さんが、わたしを食べた、

妹のマリちゃんが、

わたしの骨をのこらず拾って、

手巾に包んで、

杜松の樹の根元へ置いた。

キーウイット、キーウイット、何と、綺麗な鳥でしょう！」

靴屋はこれを聞くと、襯衣のまんまで、戸外へ駈出して、眼の上へ手を翳して、家根の上を眺めました。

「鳥や、」と靴屋が言った。「何て好い声で歌うんだ！」

そう言つて、家の中へ声をかけました。

「女房や、ちよいと来なよ、鳥が居るから。ちよいとあの鳥を見な！ いい声でうたうから。」

それから娘だの、子供たちだの、職人だの、小僧だの、女中だのを呼びましたので、みんな往来へ出て、鳥を眺めました。鳥は赤と緑の羽をして、咽のまわりには、黄金を纏い、二つの眼を星のようにきらきら光らせておりました。それはほんとうに美事なものでした。

「鳥や、」と靴屋が言った。「もう一度、あの歌を歌つて見な。」

「いえいえ、」と鳥が言った。「ただじゃア、二度は、歌いません。それとも何かくれますか。」

「女房や、」と靴屋が言った。「店へ行つて、一番上の棚に、赤靴が一足あるから、あれを持って来な。」

そこで、おかみさんは行つて、その靴を持って来しました。

「さア、鳥や、」と靴屋が言った。「もう一度、あの歌を歌つて見な。」

すると鳥はおりて来て、左の爪で靴を受取ると、又家根へ飛んで行つて、歌い出しま

した。

「母さんが、わたしを殺した、

父さんが、わたしを食べた、

妹のマリちゃんが、

わたしの骨をのこらず拾って、

手巾に包んで、

杜松の樹の根元へ置いた。

キーウイトト、キーウイトト、何と、綺麗な鳥でしょう！」

歌ってしまおうと、鳥はまた飛んで行きました。右の趾には鎖を持ち、左の爪に靴を持って、水車小舎の方へ飛んで行きました。

水車は、「カタンーコトン、カタンーコトン、カタンーコトン。」と廻っていました。小舎の中には、二十人の粉ひき男が、臼の目を刻って居ました。

「カタンーコトン、カタンーコトン、カタンーコトン」と水車の廻る間に、粉ひき男は、「コツ、コツ、コツ、コツ、コツ、コツ」と臼の目を刻って居た。

鳥は水車小舎の前にある菩提樹の上へ棲って、歌い出しました。

「母さんが、わたしを殺した、」

と歌うと、一人が耳を立てました。

「父さんが、わたしを食べた、」

と言うと、また二人が耳を立てて、聞き入りました。

「妹のマリちゃんが、」

と歌うと、また四人が耳を立てました。

「わたしの骨をのこらず拾って、

手巾に包んで、」

と言った時には、白を刻っている者は、八人ぎりになりました。

「杜松の樹の」

と歌うと、もう五人ぎりになりました。

「根元へ置いた。」

と言うと、もう一人ぎりになりました。

「キーウイト、キーウイト、何と、綺麗な鳥でしょう！」

と歌うと、その一人も、とうとう仕事を止めました。そしてこの男は、最後だけしか聞かなかつた。

「鳥や、」とその男が言った。「何て好い声で歌うんだ！ おれにも、初から聞かしてく

れ。もう一遍、歌つてくれ。」

「いやいや、」と鳥が言った。「ただじやア、二度は、歌いませぬ。それとも、その石臼を下さるなら、もう一度、歌いましょう。」

「いかにも、」とその男が言った。「これがおれ一人の物だつたら、お前にやるんだがなア。」

「いいとも、」と他の者が言った。「もう一遍、歌うなら、やってもいいよ。」

すると鳥は降りて来たので、二十人の粉ひき男は、総ががかりで、「ヨイシヨ、ヨイシヨ！」と棒でもって石臼を高く挙げました。鳥は真中の孔へ頭を突込んで、まるで力ラーのように、石臼を頸へはめ、又木の上へ飛上つて、歌い出しました。

「母さんが、わたしを殺した、

父さんが、わたしを食べた、

妹のマリちゃんが、

わたしの骨をのこらず拾つて、

手巾に包んで、

杜松の樹の根元へ置いた。

キーウイトト、キーウイトト、何と、綺麗な鳥でしよう！」

歌つてしまうと、鳥は羽を拡げて、右の趾には、鎖を持ち、左の爪には、靴を持ち、頸のまわりには、石臼をはめて、お父さんの家の方へ飛んで行きました。

居間の中では、お父さんとお母さんとマリちゃんが、食卓の前に坐っていました。その時、お父さんはこう言いました。

「おれは胸が軽くなったようで、大変好い気持だ！」

「否、」とお母さんが言った。「わたしは胸がどきどきして、まるで暴風でも来る前のよう

ですわ。」

けれどもマリちゃんはじっと坐^{すわ}って、泣^{ない}ていました。すると鳥^{とり}が飛^とんで来^きて、家根^{やね}の上^{うえ}へ棲^{とま}った。

「ああ、」とお父^{とう}さんが言^いった。「おれは嬉^{うれ}しくって、仕方^{しかた}がない。まるでこう、日^ひがぱーッと射^さしてでも居^いるような気持^{きもち}だ。まるで久^{ひさ}しく逢^あわない友^{とも}達^{だち}にでも逢^あう前^{まえ}のようだ。」

「否^{いいえ}、」とお母^{かあ}さんが言^いった。「わたしは胸^{むね}が苦^{くる}しくって、歯^はがガチガチする。それで脈^{みやく}の中^{なか}では、火^ひが燃^もえているようですわ。」

そういつて、おかみさんは衣服^{きもの}の胸^{むね}を、ぐいぐいとひろげました。

マリちゃんは隅^{すみ}っこへ坐^{すわ}って、お皿^{さら}を膝^{ひざ}の上^{うえ}へおいて、泣^ないていたが、前^{まえ}にあるお皿^{さら}は、涙^{なみだ}で一^なぱいになるくらいでした。

その時^{とき}、鳥^{とり}は杜松^{ねず}の木^きへ棲^とま^つて、歌^{うた}い出^だしました。

「母^{かあ}さんが、わたしを殺^{ころ}した、」

母親^{ははおや}は耳^{みみ}を塞^{ふさ}ぎ、眼^めを隠^{かく}して、見^みたり、聞^きいたり、しないようにしていたが、それでも、耳^{みみ}の中^{なか}では、恐^{おそ}ろしい暴風^{あらし}の音^{おと}が響^{ひび}き、眼^めの中^{なか}では、まるで電光^{いなびかり}のように、燃^もえたり、光^{ひか}ったりしていました。

「父^{とう}さんが、わたしを食^たべた、」

「おお、母^{かあ}さんや、」とお父^{とう}さんが言^いった。「あすこに、綺麗^{きれい}な鳥^{とり}が、好^いい声^{こえ}で鳴^ないているよ。日^ひがぼかぼかと射^さして、何^{なに}もかも、肉桂^{にくけい}のような甘^{あま}い香^{かおり}気がする。」

「妹^{いもうと}のマリちゃんが、」

と歌うと、マリちゃんは急に顔をあげて、泣くのをやめました。お父さんは「おれはそばへ行つて、あの鳥を、よくく見て来る。」というのと、「あれ、およしなさいよ!」とおかみさんが言った。「わたしはまるで家じゆうに火がついて、ぐらぐらゆすぶれてるような気がするわ。」
けれどもお父さんは出て行つて、鳥を眺めました。

「わたしの骨をのこらず拾つて、

手巾に包んで、

杜松の樹の根元へ置いた。

キーウイット、キーウイット、何と、綺麗な鳥でしょう!」

こう歌うと、鳥は黄金の鎖を、お父さんの頸のうえへ落しました。その鎖はすつぽりと頸へかかつて、お父さんによく似合いました。お父さんは家へ入つて、

「ねえ! とても美しい鳥だよ。そしてこんな綺麗な、黄金の鎖を、わたしにくれたよ。どうだい、立派じゃないか。」

といいましたが、おかみさんはもう胸が苦しくつて堪らないので、部屋の中へぶつ倒れた拍子に、帽子が脱げてしまいました。すると鳥がまた歌い出しました。

「母さんが、わたしを殺した、」

「おお、」と母親は呻いた。「わたしは千丈もある地の底へでも入っていたい。あれを聞かされちゃア、とても堪らない。」

「父さんが、わたしを食べた、」

というと、おかみさんは、まるで死んだように、ぼったりと倒れました。

「妹のマリちゃんが、」

「ああ、」とマリちゃんが言った。「わたしも行つて見ましょう。鳥が何かくれるかどうか、出て見るわ！」

そう言つて、外へ出ました。

「わたしの骨をのこらず拾つて、

手巾へ包んで、」

と言つて、鳥は靴を妹の上へ落しました。

「杜松の樹の根元へ置いた。」

キーウイット、キーウイット、何と、綺麗な鳥でしょう！」

と歌うと、マリちゃんも忽ち、軽い、楽しい気分になり、赤い靴を穿いて、踊りながら、家の中へ跳込んで来ました。

「ああ、」とマリちゃんが言った。「わたしは、戸外へ出るまでは、悲しかったが、もうすっかり胸が軽くなった！ あれは気前のいい鳥だわ、わたしに赤い靴をくれたりして。」

「いいえ、」といつて、お母さんは跳ね起きると、髪の毛を焰のように逆立てながら、「世界が沈んで行くような気がする。気が軽くなるかどうか、あたしも出て見ましょう。」

そう言^いつて、扉^{とぐち}口^でを出^{ひょうし}る拍^{ひょうし}子^に、ドシーン！ と鳥^{とり}が石^{いし}臼^{うす}を頭^{あたま}の上^{うえ}へ落^{おと}したので、お
かあさんはペしやんこに潰^{つぶ}れてしまいました。その音^{おと}をきいて、お父^{とう}さんと娘^{むすめ}が、内^{うち}
ら跳^{とびだ}出して見^みると、扉^との前^{まえ}には、一^{めん}面^にに、煙^{けむり}と焰^{ほのお}と火^ひが立^たちのぼって居^いましたが、それ
が消^きえてしまうと、その跡^{あと}に、小^{ちい}さな兄^{にい}さんが立^たっていました。兄^{にい}さんはお父^{とう}さんとマリ
ちゃんの手^てをとって、みんなそろって、喜^{よろこ}び勇^{いさ}んで、家^{うち}へ入^{はい}り、食^{テーブル}卓^{まえ}の前^{すわ}へ坐^{すわ}って、一
しよに食^{しょくじ}事を^{いた}しました。

底本：「グリム童話集」 富山房

1938（昭和13）年12月12日発行

入力：大久保ゆう

校正：鈴木厚司

2005年4月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。